住宅部会

住宅部会ゼミナール2011 講演報告

住宅部会は平成23年８月30日㈫、今年度の住宅部会ゼミナールとして、「住生活向上のトップランナーとして～震災の復旧・復興に向けて～」をテーマに、東京国際フォーラム（東京都千代田区）での講演会を実施しました。

本号では、当日、講演の三井所清典氏・アルセッド建築研究所代表取締役 兼 芝浦工業大学名誉教授による「復興住宅のあるべき姿」の概要を参加会員の報告にて掲載します。

三井所清典氏
アルセッド建築研究所代表取締役
芝浦工業大学名誉教授

環境共生住宅認定委員会の元は、1990年に建設省の中に環境共生住宅研究会が誕生しドイツ・イギリス・カナダに早く追いつこうと研究を始めその後、環境共生住宅推進協議会が設立され9年後に環境共生住宅認定制度が立ち上がりました。

もうひとつ住宅生産課の後押しの中で生まれているのは、自立循環型住宅の研究です。全国を6つの気候区分に分けてその地域にふさわしい住宅の開発・研究をしています。

この2つの国土交通省住宅生産課の研究成果を有効に使い全国で20の地域を選び一億円ずつ出してモデル住宅を建てたのが環境省です。その際には、環境共生住宅と自立循環型住宅の勉強会を各地で開き工務店・設計事務所の方を集めて3回講習を受講していないとこのモデル住宅へのプロポーザルに権利が無いという仕組みをもって進めてまいりました。

今、私は木造とまちづくりを一生懸命やってますが、元々は学生時代で公団住宅の断熱性能と遮音性能に関する研究と接合部の研究を学んで来ており大学時代は、工業化・システム化というのがテーマでした。私自身、集合住宅のプレハブ化を数千戸手がけてまいりました。

こうした経緯の中、昭和52年佐賀県有田焼の町で美術館の設計に携わることになり我々が大学で学んだ建築がまちなみを壊していることに気づきました。江戸から昭和10年までの調和したまちなみが、RC建築物で壊されていました。それ以来、私は田舎の応援団をしています。

豪雪地帯の富山県五箇山地域にある上平村での実例です。合掌作りの住宅の合掌を降ろして雪降ろしをしないような2階建ての家づくりです。現地で5寸・4寸・3寸勾配の実験をし4寸勾配だけが雪が滑って落ちない。雪割り棟がついていないからです。こうして現地の人に雪割り棟の効果を理解して頂き家づくりに入りました。

私は、軒が深い屋根が落ち着いて美しいと感じていましたが、五箇山地域のような豪雪地域ではこのような家は雪に埋もれてしまうことがわかりました。それ以来、自身の見方が変わり美しいものと地域に合うものが必ずしも同じではないと理解しました。

私は、庇を出すというのに抵抗があり庇が無い家はかっこいい。特に妻側に庇が無いのが、かっこいいと当時は考えていました。

しかし、耐久性や雨・風の問題を考えますと庇の無い屋根を見ると雨の中で傘を差してないとか、日照りの中で日傘を差してないで立っている人のように見えてかわいそうだと見えるようになってきました。

地域の文化や気候風土を考えることによって見方が変わってきます。地域の生活文化を考えながら地域に合った住宅を作るのが大切です。(写真1)

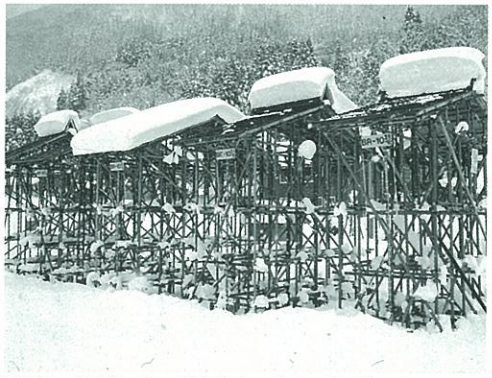

写真1　地域にあった住宅をつくることが大切

次の事例は同じ豪雪地帯ではあるが、マイナス15度からマイナス20度になる南会津の山奥にある舘岩村でのあったかい家づくりです。骨組みは地元の大工さんが建て断熱性能・気密性能は私が教え性能の良い家を4戸作りました。真冬は、土間に車を入れる広さを確保し夏の間は、扉を開け子供たちの遊び場になります。地元の中学生を呼びこの地域の湿度・気温などを勉強してこの村での生き方などを学ぶ機会を作りました。(写真2)

写真2　中学生が学ぶ場の機会も創出

五箇山地域での上平村と南会津の舘岩村での経験から新潟県山古志村での震災復興の仕事を携わることになりました。ここでの「中山間地型復興住宅」検討委員会では、①雪に強く、②山の暮らしに配慮され、③約一千万円で建てられる。というのが目標でした。山古志の棟梁とのワークショップ会合を重ね、この地域での住宅を我々が理解しこちら側からは、五箇山・南会津での体験を山古志側に伝え双方で話し合った上でどんな家を建てるかの方向を出していきました。

一つのテーマは、「未完成で山へ戻って来て下さい」というのが私の願いです。未完成だと安くて早くて、大工さんにとっては仕事が少ないということが起こりますが、完成すると山へ帰って来たあと仕事が無くなります。大工も左官も仕事が無くなり山で生活できなくなりいずれ山を下りるであろう。若手後継者を育てることはしないであろう。30年後はどうなるんだろう。この村では大工がいない無大工層が出来てしまう。困るのは村の住民です。

図1　山古志らしい外観を継承したモデル住宅

私の山村での復興住宅の考えは、小さく作って増築ができるようにする。とか2階は仕上げない未完成の建て方をするというものです。(図1)

私は、こうして仕事が続いていくことを「生業(なりわい)の生態系」という言葉を使っています。その村の社会の仕組みとして仕事を無くさないようにすることが大切と考えます。

復興にあたり大切なことは、再建者・施工者・設計者の役割分担です。山古志の再建者グループ・大工工事グループ、設計支援をする設計グループの三者が一堂に会し集まる時間を持つのは難しいと考え、設計グループはモデルを作り再建者グループとバリエーション対応を受け持ちます。大工工事グループは施工に専念して復興にあたりました。(図2)

この話を能登半島沖地震のとき輪島市長が聞き見に来て輪島市の中で話をとの依頼を受け県庁の方・輪島市の方・地域の工務店と設計者の人

に山古志での復興住宅の話をしました。出来上がったのが能登ふるさとモデル住宅です。

その他、長野県栄村の村長や米国研究者が山古志の視察にやってきました。

今回の東日本大震災の復興では、宮城県石巻市で工学院大学の後藤先生が10世帯の提案をし、建てておりこちらから山古志での図面を差しあげてこれをベースにしているため概ね山古志のようなタイプが出来ています。

復興住宅建設にあたり設計グループと大工工事グループの関係が大切になってきます。山古志の復興で長岡市お願いしたのは、設計グループのメンバーは大工の仕事に敬意をもっており大工に馬鹿にされない建築家を入れて下さいと頼みました。

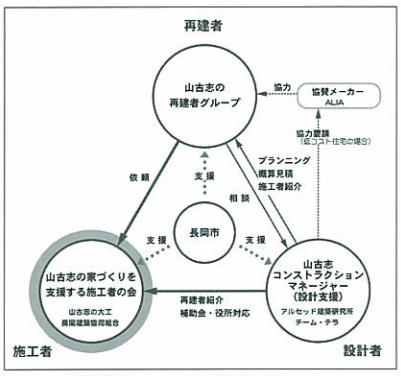

図2　復興にあたっての役割分担

その後、この復興住宅に協力してくれた長岡市の工務店・建築家が核になって新潟県での自立循環型住宅の勉強を始めております。今後、地震が起きてもこうした動きのある地域では復興対応が迅速であると考えます。

力を合わせながら街並みを整えていく

次に、街をどうマネジメントするかという紹介をします。長岡市和島村島崎での良寛の里の街並づくりです。良寛さんが最期の5年間住んだ街です。この街の人たちの誇りは産まれる場所は選べないが死ぬ場所は選べる。良寛さんが選んだ街を誇りにしております。はちすば通りでの良寛さんの住んだ街並みづくりに取り組んでおりこうして10年くらい住民がその気になって整えていくと良い街になります。（図3）

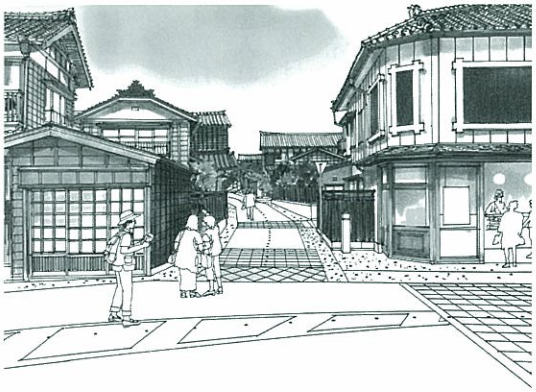
図3　はちすば通り東側入口

わが街を良くするにはどうすれば良いか。住民たちとの会話、つくり手との会話でわが街を論じ街づくりを進めていきます。このように力を合わせながら街並みを整えていくことをタウンマネジメントと言います。

島根県石見での取り組みです。ここでは、石見流のまちなみをめざして地元の地域資源である赤い石州瓦で屋根の色を揃えてもらいました。この中に積水ハウスさんとミサワホームさんがあります。このように地域の資源を取り入れることが環境共生住宅の目標です。私は、方言のような家づくりと言っており標準語に少し訛りを入れてもらうということ盛んに言っています。（図4）

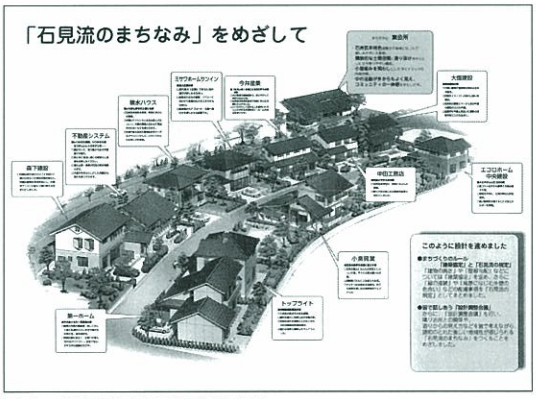

図4　島根県石見での取り組み

地域の復元力を起こしていくのは、いろいろな面で力を合わせていかなければなりません。わかちあいと言うのは重要で時間をかけながら「生業（なりわい）の生態系」を構築する必要があります。在来木造で作る設計事務所・工務店の仕事と住宅メーカーが作る洗練された安心のある家づくりが共存できたら良いと願っています。場合によっては、石見のように地域の資源が互いに使われるように手を結び握手することができれば良いと願っています。

本日は、地域の復興と復元力に際し未完成の家づくり・生業（なりわい）の生態系という今までとは違った家づくりの発想で心を改めていくような時代を向かえていくことを願います。

（報告・岡靖明）